

登録有形文化財（建造物）について（追加資料）

日高^{ゆたか}胖について

日高胖は、住友本店臨時建築部の技師として明治末から昭和初期に活躍した建築家であり、日本におけるアール・ヌーヴォーの初期導入者として知られる。

明治8年（1875）に東京で生まれ、東京帝国大学工科大学造家学科を卒業、発足直後の住友本店臨時建築部（注）に技師として着任した。昭和5年（1930）に定年を迎えて退職後、住友ビルディング取締役役に就任したが、昭和27年（1952）に79歳で没した。

主要作品として、神本理髪店（1904年、現存せず）、大阪府立図書館東西翼棟増築（1922）、住友ビルディング（1930）等がある。

注）住友本店・銀行本店建設のための臨時的な営繕組織として創設され、その後、住友本店営繕課、住友合資会社工作部等に発展改組されていった。

【日高家住宅 概要】

日高家住宅は、日高が住友を退職後、自身が設計して鎌倉市腰越に営んだ自邸であり、現在はその孫が居住している。日高は、他にも兵庫県宝塚市と東京都渋谷区に3軒の自邸を建設し（鎌倉と宝塚の2軒が現存）、これらの自邸を通じて和洋折衷を試みている。

鎌倉自邸は、木造2階建て、銅板葺で、複数の屋根が重なり合う複雑な構成を採る。外壁は杉皮張りで、真壁や垂木をみせる軒の深い庇など一見すると和風だが、出窓、テラスなど洋風の要素が混在する。内部も同様に、数寄屋風を基調としつつ、コルク張りを椅子座・床座に両用するなど、一室内に和と洋の意匠を違和感なく併用する。また、1、2階の廊下や書斎は足下に窓を設けて通風に配慮し、廊下の壁の仕上げは、土壁の上に和紙を張るなど日高独自の仕様となっている。家具や照明器具も日高自身の設計でアール・ヌーヴォーの影響が強く、日高が同様式の日本におけるごく初期の導入者である点を裏付けている。

この鎌倉自邸は後世の改造が極めて少なく、かつ家具や照明までよく残る点は極めて貴重である。門及び塀も、建設時に主屋と一体で計画・施工されたもので、敷地の重要な構成要素となっている。なお、日高は住宅を選ぶ条件として、交通の便は良いが閑静な土地であること、平地より傾斜地の方が採光や排水等に優位であることを挙げており、鎌倉自邸の立地はこれによく合致し、傾斜地に位置する目白山住宅地の歴史的景観にも寄与している。